

物語・夢・喪失

——『更級日記』と読者——

奥村英司

一

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひでたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののおんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでおほえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。(小学館『新編日本古典文学全集』二七九―二八〇頁・以下頁数のみ記す)

『更級日記』冒頭である。ここで、日記の「主人公」が、幼少期を東国に育ち、物語に憧れ、神仏に祈り、上京と

物語との邂逅を願う中で、十三の年に帰京が決まる、といった内容が記される。物語への憧憬と仏道への帰依、という二つの作品の主題を呈示しつつ、主人公の置かれた状況を要領よく説明している。

ここで「人」と呈示される主人公は、この作品の作者菅原孝標女その人であり、自身を第三者として対象化した表現だと理解される。だがそれは、「かく」「つくる」という視点からの説明であり、「よむ」側、読者の視点から説明すると以下のようになる。すなわち、「人」とは一般化の表現だから、ここには「あづま路の道のはて」より「奥つ方」で育った人々一般が想定される。一方で、都への帰還が語られることで、それは本来都で生活すべき人の事だ、と限定もされる。都の風雅から遠ざかり、東国の鄙で育った、というやや特殊な事情が、主人公のアイデンティティとして呈示され、よむ側はそれを受容しつつ、主人公に心を寄せることになるだろう。「よむ」という行為は、作中の人物に共感し、一体化することだとすれば、まずここで一般的な「人」として呈示されることが、読者の共感をよびおこす一助となっている、とも見られるだろう。

作者の側からは、過去の自己を対象化するという目的のための表現が、読者の視点からは作品への没入へと導くものとなる。すでに書かれた作品に構造化された読者の反応というものを見て取ることに。ここに文学の読者論への可能性がひらかれる。

文学において作者より読者を語るのが困難なのは、読者は無数にあつて、しかも同じ読者が同じ作品を読むのであつてもその読み方はその度に変わつていくかも知れない、そもそも古代文学の場合、その作品の成立時の同時代の読者と、現代の読者を同一視出来ない、といったような読者の定義づけの不確定性によるだろう。しかし、それなら作者とは、その作品の作者とされる歴史上の存在ただひとりだと言えるか、と問うなら、こちらも問題はさほど容易ではないことになろう。誰が作者かが明確であるはずの近現代文学においても、代筆やゴーストライターという可能性

もあるし、協力者や編集者の意見が反映されることもある。現代において作者とはいわば作品という商品に付される商標のようなもので、必ずしも実在の一人の人間に還元できるわけではない。まして古い時代の作品となれば、作者未詳のものもあれば、伝承される作者が正しいかどうかを実証することができない場合の方が多い。加えて本文の書写によって大きく本文が改変される可能性や、さらに近・現代人なら注釈という他者の解釈を通過しなければ作品に触れる事が出来ないことを考えれば、書写者や注釈者も作者の一人と数える事が出来るだろう。

「推敲」という語の由来となった中国の『唐詩紀事』所載の逸話がある。唐代の詩人賈島が、科挙試験の受験に向かう道すがら、自作の詞の一節を「僧は推す月下の門」か、「僧は敲く月下の門」か、いずれにすべきか悩んでいたところに、著名な詩人韓愈に遭遇して、「敲く」の方が良いとの助言を得た、というものである。この場合この詩の作者は賈島なのか韓愈なのか。「推す」と「敲く」のどちらかで悩んでいる時、賈島は作品の鑑賞者の位置にある。作者はそもそも、自身が書いた作品の最初の読者となるのである。「推す」か「敲く」か、その一語によって描写される夜の情景の聴覚的な印象は一変するのだから、この一語は作品の根幹といえるのであり、韓愈の一言がこの詩を完成させたという点で、更にはそこに韓愈という詩人の助言という権威付けがなされたという点においても、韓愈が作者の一人になるとみることもできる。もともと、その詩の全体を作り上げたのは賈島であり、韓愈はあらかじめ鑑賞者の位置から助言したのでもある。この逸話は、漢詩の制作という特殊な場面ではあるものの、「つくる」「よむ」という行為が表裏一体であり、読者と作者とが二項対立的に存在するのではなく、相互に補完してあることを示している。

さて、読者の視点を導入して改めて『更級日記』冒頭を見てみよう。「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひでたる人」は、『古今和歌六帖』所収の「あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」（紀

友則)を引用しつつ、史実では上総で過ごした作者が、常陸国よりもなお奥地という場所を仮構した物語的表現とされ、そこに常陸介の養女として東国に育ったという『源氏物語』の浮舟を重ねている、と言われている。歴史上の人物である作者菅原孝標女の、辿れる限りの史実を照合すれば、自身を「人」と三人称化していること相まって、物語的な虚構の方法で書かれている、ということになるが、これは作品を「つくる」側からの説明である。だが、作品を「よむ」側からすれば、そのような作品外の情報以前に、東国の奥地で育った少女、という非日常性をこめた「主人公」にまずは心を寄せることになるだろう。「いかばかりかあやしかりけむ」「いかに思ひはじめける」と、その詳細は読む側に委ねられる、そのことで喚起される想像力が、一気に作品内に一般化されている「人」を、読み手のものとして自身に引き入れるのである。「いかばかりかあやしかりけむ」の「あやし」は、都人から見た違和感であり、本来は都で育つ筈だったこの主人公の、見た目なのか内面なのか、その詳細を想像する中で、読者なりの主人公像が形成されていく。そこに、『源氏物語』への憧憬という、具体的な記述が表れる。「姉」「継母」といった家族構成(東国に下向しているのだから父親の存在はいままでもない)が説明され、「実母」の不在も、話しを聞けばかりで実物に触れる事の出来ないもどかしさ、「よむ」べきものを「よめない」といういらだちを「よむ」という体験を讀者に与えつつ、薬師仏への願によって物語との邂逅を願う、という神仏頼みの心境へと転じていく。十三という年齢や「九月三日」という日付、「いまだち」という地名などの具体的な記述を並べ立てて、紀行文へと転じていくとき、読者は主人公とともに都に帰る旅を疑似体験することになるだろう。

都への帰還という希望に満ちた出立であるはずだが、その記述は暗く重い。

年ごろ遊び馴れつる所を、あらはにこほちちらして、立ち騒ぎて、日の入りぎはの、いとすこく霧りわたりたるに、車にのるとて、うち見やたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつ

る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。(二八〇頁)

長年慣れ親しんだ屋敷を、「あらはにこほちちらし」とは、調度などを取り払って外からも丸見えになった状態というが、そこに残された薬師仏もあらわに見えているのが悲しい、と心情を綴る。薬師仏が放置されたのは、主人公自身が掘った拙いものであったからか。人目を避けて祈っていたのも、他の人々には価値のない仏像であったからだろうか。詳細は読み手の推測に委ねられるものの、帰り行く都への期待よりも、住み慣れた場所を去る寂しさが勝るのは、都の思い出がほとんどない少女ならではの感慨か。詳細は省かれていては、読む者に少女の持つ心の暗さが伝わるような描写、共感のための記述となっていよう。説明的な記述が排されることで、読む側が想像力をはたかせる余地を生み出し、かえって共感できるといふ仕組みである。

この場面をはじめとして、この日記の序盤には喪失感が色濃く出されている。京に上るまでに、下総国「まつさと」での乳母との別れが記されるが、あくまで乳母の出産による一時的な別離であるにも関わらず、ほとんど死別でもあるかのような描写がされている。

皆人は、かりそめの仮屋などいへど、風すくまじく、ひきわたしなどしたるに、これはをとこななども添はねば、いと手はなちに、あらあらしげにて、苦といふものを一重うちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひてかき撫でつつ、うち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ率で行かざる心地、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ。(二八二頁)

夫もおらず、月の光が漏れて来るような粗末な家で、出産後の血の気も失せた白い顔が月光に照らされるさまは、ほとんど死人のようである。その乳母の様の哀れさが、主人公に深い喪失感をもたらしているのである。結局、上京

後の三月、乳母の死が知らされ、東国の日々を共にした継母は去り、世間では侍従大納言藤原行成の娘の死が人々を嘆かせる。

そうした記述の一方で、竹芝の伝説や富士川の古老の体験談、遊女との出会いなどが道中記に記されている。竹芝伝説に関してはかなり詳述されており、記述量のバランスは崩れている。内容も、悲惨な結末を迎える事が多い「女を盗む」方の話でありながら、帝の娘を盗んだ男を武蔵の国主として認める、という結末になっており、それまでの喪失感漂う記述とは無縁の内容となっている。ここで読者は、日記の中で独立性の強いもうひとつの、いかにも物語的な物語を読むことになるわけだが、その直後、『伊勢物語』の東下りについては触れられるものの、同種の話しである芥河の段については言及されない。読者が当然想起するものについてはあえて記述しないと言うことか。また富士川の古老の話は、除目を予告するような紙を見た、という現実離れた奇譚であり、超自然的な力の発動を語り、現実離れた内容になっている。

現実世界での喪失感・物語への憧憬・現実離れた逸話、これらは相互に関わりながら作品世界を形成しているのである。

二

『更級日記』は、物語を「よむ」ことに言及しているという点で、読者という視点を明確に持った作品ではあるが、後の『無名草子』のような作品批評の視点を持ち合わせているのではない。現実世界での離別・喪失を埋め合わせる形で物語を読む行為が位置づけられているのである。そもそも、物語との出会いを願った薬師仏との別れはその原点にあった。上京後の継母との離別・乳母と侍従の大納言の娘の死によって沈み込んだ主人公を救うのが、『源氏物語』

との出会いである。

かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおほゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおほゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。(二九七頁)

主人公の物語への関心は、つねに他者から与えられている。きつかけとなったのは義母と姉の話だったし、ここでも実母が落ち来む彼女に気をきかせて物語を与えてくれるのであり、自身では物語を欲していることを「人かたらひなどもえせず」、すなわち誰かに明かすことなく心の内に祈るばかりである。かつて薬師仏に祈っていた時も、「人まにみそかに」であった。物語の入手は、少女が口に出すのをはばかりに難しかった。それゆえ、「源氏の物語」を全巻手に入れることは、ここまで失われてきたものによって生じた心の穴を埋めるに足る重みを持つ。その後、「をばなる人」によって物語が与えられる時、口に出さなかつた筈の願望が、「ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」と、「をば」の耳に入っていたというのだ。

都にいながら入手できなかつた物語を、「田舎」から上京してきた「をば」が与えてくれるというのも考えてみれば不自然だが、ここには少女の「願」が超越的な力によって実現した、という構図を読み取るべきであろう。近親者の努力ではなく、たまたま訪れた外部の人間によって与えられるという奇跡が、喪失感を埋め、物語への耽溺を深める。

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近く

ともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。(二九八—二九九頁)

物語を入手して、帰る間も惜しんで読み始める、遂には寢食を忘れて耽溺する、という一般的な心情の中に、唐突に僧の夢が挿入される。物語よりも、「法華経五の巻」の方がはるかに重要だ、という暗示だがここで読者は、物語に耽溺する少女に対する共感を相対化することになる。少女が物語りにのめり込むようには、読者の耽溺を許さない、過剰な共感もしくは自己投影を許さないのがこの作品の世界なのであって、これは「かく」側の視点からは、物語にばかり夢中になつて仏道に心をいたさない、かつての自分の幼さへの批評的態度、といえるのかもしれない。が、「よむ」側の読者は、所詮作品外の存在であり、決して作中の少女たり得ないという意識を呼び覚ます。物語を「よむ」ことを描きながら、「よむ」ことによる共感や自己投影を相対化している、と言えるだろう。

物語と夢告とは、この後も一体となつて表れる。

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎりは、これをのみ心にかけてるに、夢に見るやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、

「天照御神を念じませ」といふと見て、人にも語らず、なにも思はでやみぬる、いといふかひなし。(二三〇〇頁)

物語に耽溺する中で見た奇妙な夢を、人に語ることもなく黙殺したことへの悔恨が記される。「天照御神を念じませ」は、その後、

ものほかなき心にも、つねに、「天照御神を免じ申せ」といふ人あり。(三二二頁)

という記述から、同様の夢を繰り返し見たことや、後年夫死後の記述に、

年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。(三五七頁)

とあって、皇族の乳母となる運命を示していたものであり、結局は実現しなかったことがわかる。「夢ときあはせしかども」は、先の「人にもいはず」と矛盾するが、後年まで気になって夢解きをさせた、ということか。物語に耽溺していたことと夢を語らなかつたこととの間には何の脈絡もないはずだが、読み手はここで、物語のために告の重要性に気付かなかつたかのような印象を受ける。さらにこの後、拾つた猫が侍従大納言の娘の転生したものだといふ姉の夢が記される。だが、その猫は死に、続いて姉の死も描かれる。

母などは皆亡くなりたる方にあるに、形見にとまりたる幼き人々を左右に臥せたるに、あれたる板屋のひまより月のもり来て、兄の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおほゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかきよせて、思ふぞいみじきや。(三〇五頁)

姉の遺児の顔に月の光が当たり、不吉に思う、というのは先の松里での乳母の姿と重なるように読める。その後親族から姉が探していたという「かばねたづぬる宮といふ物語」が贈られる。ここでは物語は、もはや心を慰めるものではなく、「かばねたづぬる」が、まるで姉が死を予感していたかのように受け取られ、また姉の死後に入手できたことも偶然とは考えられなくなるだろう。ここに父の任官失敗が加わり、喪失感が深まっていく。

『更級日記』巻頭からここまでを概観してみると、そこには物語への憧れを核として、富士川の古老の話から、黄色の袈裟を着た僧、六角堂の遣水、大納言の娘が転生した猫といった現実離れた夢告の世界、人々との離別といっ

た現実での喪失感、が重層しながら繰り返し描かれる。これが、実体験の忠実な再現なのか、日記構成上の意図的な構成なのか、「かく」という視点から見ればそのような点が問題になるかもしれない。だが、ここで読者が作品を通して体験するのは、要約すれば誰にでも起こりうるような平凡な人生が、現実と非現実とが交錯する表現の中で、いかにも特異で他に例を見ない体験として現前するということだ。

物語に憧れながら、光源氏や紫の上のような超現実的な存在たりえない、それが読者たる「私」の現実である。

からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおほえけり。(三一―四頁)

一見するに少女らしい夢想とも見えるが、ここに描かれているのはほとんど隠遁・隠棲というべきものではないか。『源氏物語』の読者であれば、まず光源氏と浮舟との組み合わせに違和感があるうえに、浮舟の人生がいかなる苦悩の連続であったかを知らぬはずがない。年に一回の夫の訪れを待つ山里暮らしが、現実には何の希望もないものであるにも関わらず、ここでは現実逃避の目的地として幻想されている。

虚構の物語の主人公のような特異な人生を歩むのではない、ごく平凡な人生であつてもそこに書き記すべき山や谷がある。その最たるものは近親者との別離であろう。『更級日記』前半部で書かれているのは、主人公の少女自身の事ではなく、帰京と近親者の死がその大部分を占めている。読む者の憧憬の対象ではなく、現実的な生活感を共有するものとして日記がある。主人公にとって『源氏物語』がどれだけ重要であつたとしても、この作品が立脚しているのは、「光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは」という現実である。たとえ凡庸であつても様々な苦悩が襲

ってくる人生を乗り切るのは、物語の幻想によってではない。一見現実逃避による癒やしを求めているかのようなこの作品に、読者は自身のかなしみを投影し、受け止めるしかないのである。

三

「日記文学」に読者は、作者の実人生の投影をみる。もつともそのジャンル区分は、「よむ」行為以前に他者から与えられたものだから、先入観だと言うこともできよう。だがそこに書かれたことがすべて事実であるかどうかは検証することはできない。あるいはすべてが虚構なのかも知れない。「菅原孝標女」という人物さえ虚構の存在かも知れない。そもそも「よむ」という行為は記述の虚実を判定するためのものではない。では、読者はなぜ『更級日記』をよむのだろうか。平安貴族の生活の実態を学習しようと言うのなら、この作品はほとんど役に立たない。現代人と平安人との間に共通する心性を見出だすためだろうか。あるいは教材としてよむことを強要されたからだろうか。

「そこに山があるから」山に登るように、そこに作品があるから、目の前にあった本をたまたま手にしたから、という理由もあるかもしれない。脳科学の成果を借りれば、読書の際の脳内物質の発生を測定することも可能となるだろう。

『源氏物語』を耽読した少女は、その作品世界そのものほとんど言及することはない。断片的に光源氏や薫、浮舟と言った名が記される程度である。仏道や夢のお告げに比して、虚構の物語など所詮は児童に等しかったということだろうか。真相は闇の中だ。あるいは真相は読者の心の内にある、と言うべきか。「私」はなぜこの作品を読むのか、という問の反復にこそ、「よむ」という行為の本質が隠されているということか。

あらかじめ与えられた「テキスト」に束縛されつつ、そこから「読者」の想像力がいかに飛翔するかという攻防こ

それが、「よむ」という行為だとすれば、そこに表れる「作者」とは、歴史上実在した人物の実像などといったものではない。「よむ」私を相対化する他者でありつつ、同時に作品に耽溺する私が投影された唯一無二の存在であるはずで、そこでは記された内容の虚実はさしたる問題ではない。ここで、作品の読みを語るといふ行為は、「よむ」から「かく」への転換であり、普段に更新される行為を一瞬焼き付けたものであり、「かく」は再び「よむ」に転じ、その往復運動の中にのみ文学作品はある。